

炎 鵬 関

市川茂子

校庭の古^ふりし囲いの山茶花は取り払われて高き塀立つ

青天の空にあやなす櫛大樹絵画に見ゆるビルの間に

年末になれば数の子味付けしひとりの卓の中心に置く

中天に昇る初陽を浴びながらあと何回の初詣ならん

正月を酌みかわしいる三人なりかくなる縁^{えにし}いつまでつづく

年明けて賑わう街の地下道の端あゆみゆく煽られながら

初場所に組手の足を持ち上げて炎鵬関^{えんほう}は勝ち越し決める

ことさらに小柄な力士の炎鵬関勝ち名乗り受く面輪さわやか

東京の桜開花の標本木老木ながら境内にあり

道すがら臘梅咲ける塀内の静かな庭をしばらく見さく